

機関番号：10104

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520205

研究課題名 (和文) ユダヤ人の記憶とホロコースト研究における記憶の政治学

研究課題名 (英文) Zikkaron and the Politics of Memory in Holocaust Studies

研究代表者

羽村 貴史 (HAMURA TAKASHI)

小樽商科大学・言語センター・准教授

研究者番号：00312439

研究成果の概要 (和文)：

ホロコーストの記憶について、根源的に新しい視点から研究すべく、本研究期間中は、ユダヤ教が伝統とする思考様式をとくに「記憶」の観点から捉え、聖書解釈学、ユダヤ神秘主義、ハロルド・ブルームの文学批評理論、ゲルショム・ショーレムの歴史記述という、自分にとって未知の領域だった分野を中心に論文を執筆した。また、ホロコースト後の世界を描いた小説について、上述の観点から解釈する論文を執筆した。

研究成果の概要 (英文)：

Zikkaron, or the mode of memory peculiar to Judaism, is clearly different from the mode of history. The goal of my Holocaust Studies will be to investigate Holocaust representations in terms of zikkaron. For this end, I studied Hermeneutics of Judaism (both by Christian theologians and Jewish scholars), Jewish mysticism, and fiction representing the post-Holocaust secular world. I wrote papers about Gershom Scholem's historiography, Harold Bloom's psycho-rhetorical kabbalistic literary criticism, and a novel by Isaac Bashevis Singer.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：英文学、ユダヤ研究、ホロコースト研究

科研費の分科・細目：文学 ・ 英米・英語圏文学

キーワード：ホロコースト、カバラー、ユダヤ思想、誤読理論

1. 研究開始当初の背景

当初、一般的な表象論としてホロコーストを研究し、その「記憶」について吟味していたが、ユダヤ人が伝統とする「記憶」や再現前化が、

通常われわれの考えるそれとは異なることに気づき、宗教と思想を中心に根本的な再考が必要だと判断した。

2. 研究の目的

本研究は、ユダヤ教が伝統とする思考様式に関する言説とホロコースト表象論とを融合させ、ホロコースト研究それ自体に寄与するとともに、単なるホロコースト表象論ではなく、それを「ユダヤ研究」という枠組みから文化研究として完成させることを最終的な目的とする。それにより、通常われわれが「記憶」や「表象」という語から想起するものとは異なる思考様式を体系化し、新たな観点から表象論に寄与することが期待できる。

3. 研究の方法

研究期間中は、すでに馴染みのある一般的な文化研究やホロコースト表象論よりも、ユダヤ人の宗教や思想の理解に主眼を置いた。そのため、聖書解釈学、ユダヤ神秘主義および世俗的ユダヤ思想として Harold Bloom の文学批評理論を中心に論文を執筆し、「記憶」のテーマを追究した。また、夏季休暇中に渡米し、現地の専門家と意見交換するとともに、正統派ユダヤ教の聖職者たちと面談し、書物からは学び得ない事柄について説明を受けた。

4. 研究成果

本研究は、ユダヤ教が伝統とする思考様式に関する言説とホロコースト表象論とを融合させ、ホロコースト研究それ自体に寄与するとともに、単なるホロコースト表象論ではなく、それを「ユダヤ研究」という枠組みから文化研究として完成させることを目的とした。ユダヤ教固有の思考様式についても、ホロコースト表象についても、それぞれの分野で盛んに研究されているが、その両者を融合させることで「記憶」の言説それ自体を問い直すとする試みは、わたしの知るかぎり（また、海外の研究者たちに相談したかぎり）先例がないし、少なくとも一般的ではない。その点で、本研究には独創性があるろうし、ホロコースト研究の新たな可能性を模索できる視点である、と信ずる。

ユダヤ教固有の思考様式を明らかにすべく、本研究では、伝統的な聖書解釈学の言説や最新のカバラー研究をふまえつつ、とくに Harold Bloom の思想に注目した。カバラーについては、わが国でも Gershom Scholem の翻訳等を通じて知られているが、最新の研究成果については、少なくとも広く知られてはいない。また、Bloom の思想については、文学的ないし心理修辭学的な面での研究は進んでいるものの、ユダヤ神秘主義の観点から詳細に論じた先行研究は、世界的にもそれほど多くはない。その点で、本研究の成果には意義があったと信ずる。

Bloom は、ラビたちと同様、換喩的な発想でもろもろのテキストを解釈しており、ホロコースト表象論についてもこれに類した姿勢で取り込まれるべきだというのが、わたくしの立場である。ただ、反省点として、とりわけ Bloom の研究には膨大な時間を要したため、この研究期間中にホロコースト表象論について十分に議論することはできなかった。

(1) Harold Bloom の文学批評理論

Harold Bloom の文学批評理論については、論文の 2、3、4、5 で詳しく論じた。論文 5 「修正比率——誤読理論の基本概念」で論じた「修正比率」については、世界的にもよく知られており、とくに珍しいものではない。しかし、論文 4 「後続性の心理修辭学——Harold Bloom の誤読理論」では、これまであまり論じられてこなかった事柄を含め、彼の文学批評理論について詳細に吟味した。その内容は、「グノーシス」、「キルケゴールの反復理論」、「精神分析学における転移」、「オルペウス」、「再置換と呼ばれる修辭」、「間テキスト性ないしインター・ポエムの関係性」、「Bloom 理論におけるアメリカ文学の伝統」と多岐にわたる。さらに、論文 3 「Harold Bloom とヘブライの解釈

様式』は、ブルームとユダヤ神秘主義との関係性に正面から向き合った論考である。両者の関係については、スーザン・ハンデルマンが早くも 1982 年の段階で論じていたが (Susan A. Handelman, *The Slayers of Moses: The Emergence of Rabbinic Interpretation in Modern Literary Theory*. Albany: SUNY, 1982)、その後に発展的な議論が展開されてきたとは言いがたい。論文 3 では、とくにイツハク・ルーリヤによる「収縮 (Tzimtzum)」、「器の破壊 (Shevirath HaKelim)」、「修復 (Tikkun)」という一連の神学上の教義と、ブルームの「限定化」、「代置」、「再現前化」という文学的な修正主義の弁証法との関係を、これまでになく詳細に解説した。なお、論文 2 については次項で述べる。

(2) ユダヤ教

ユダヤ神秘主義については、とくにゲルシヨム・ショーレムの著作の翻訳と受容を中心に研究がなされてきた。しかし、現在のユダヤ研究は、すでにショーレムの弟子たちが学界の重鎮となっていることから窺えるとおり、幅広く研究が進んでいる。論文 2 「創造と修正主義—ルーリヤ派カバラとユダヤ人の離散」では、イツハク・ルーリヤの教義を詳細に分析するとともに、その歴史性に注目したショーレムと、その修辞性に注目したハロルド・ブルームそれぞれの重要性を再吟味した。また、論文 1 「ユダヤ教における記憶と時間」では、ユダヤ系の研究者たちが登場する直前の時期に、クリスチャンの神学者たちがいかにユダヤ聖書を研究していたかを再確認すべく、1960 年代の古典的な聖書解釈学の言説を整理した。以上の研究は、ユダヤ教それ自体の理解に役立つばかりか、そこで明らかになったユダヤ教特有の思考様式を別の言説に応用できる点で、きわめて有用であると考えられる。なお、学会における口頭発

表「正統派ユダヤ教の世界—その思考様式と宗教生活」は、渡米の際に視察したユダヤ教寺院で見聞したことを中心に紹介したものであるが、わが国にはなかなか眼にできない事柄ばかりなので、おおむね好評であった。

(3) ホロコースト後の世界表象

西洋の支配的な思考様式が、隠喩性と直線的な時間性と歴史性を特徴とするのに対し、ユダヤ教の思考様式は、換喩性と非連続的な時間性と記憶を特徴とする。論文 6 「記憶への回帰— I・B・シンガー『悔悟者』」は、そのようなユダヤ教の世界観やユダヤ人に固有の思考様式を踏まえた上で執筆した作品論である。本来、本研究期間中に目指したのは、ホロコースト表象論を中心に、本稿のような論文を 1 本でも多く書きためることであったが、ユダヤ教やユダヤ思想それ自体の研究に時間がかかり、新たな論文をこれ以上に書くことができなかった。しかしながら、発表済みのホロコースト表象論については大幅に加筆修正を施すことができたし、今後の研究の方向性を明確に定められるようになったことこそが最大の収穫であったと確信する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

- ① (査読なし) 羽村貴史 「ユダヤ教における記憶と時間」『小樽商科大学人文研究』120 (2010): 97-110.
- ② (査読なし) 羽村貴史 「創造と修正主義—ルーリヤ派カバラとユダヤ人の離散」『小樽商科大学人文研究』119 (2010): 135-73.
- ③ (査読なし) 羽村貴史 「ハロルド・ブルームとヘブライの解釈様式」『小樽商科大学人文研究』118 (2009): 243-78.

- ④ (査読なし) 羽村貴史 「後続性の心理修辞学——ハロルド・ブルームの誤読理論」『小樽商科大学人文研究』117 (2009): 39-89.
- ⑤ (査読なし) 羽村貴史 「修正比率——誤読理論の基本概念」『小樽商科大学人文研究』116 (2008): 69-75.
- ⑥ (査読あり) 羽村貴史 「記憶への回帰——I・B・シンガー『悔悟者』」『北海道アメリカ文学』24 (2008): 37-54.

[学会発表] (計1件)

- ① 羽村貴史 「正統派ユダヤ教の世界——その思考様式と宗教生活」日本アメリカ文学会北海道支部 (2010年4月24日、藤女子大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

羽村 貴史 (HAMURA TAKASHI)
小樽商科大学・言語センター・准教授
研究者番号: 00312439